

# 生徒の参加意欲を高める英語の授業づくりについて

—学力低位層の参加を目指して—

江口 圭介

Development of English Lessons to Enhance Students' Motivation for Participation:  
Encouraging Underachievers' Participation in English Lessons

Keisuke EGUCHI

はじめに：A教諭の授業を観察した際に、活動内容に積極的に取り組めない学力低位層の存在を意識するようになった。しかし、観察をしていく中で、学力低位層の生徒たちが楽しそうに授業に参加している姿が印象的であった。このような生徒たちの良い表れを引き出しているのが、A教諭の指導力であると感じた。A教諭の授業構成やコミュニケーション活動の工夫、生徒たちが活躍する場面を保障することなどが要因であると考えて、以下の目的をたてた。

1. 研究の目的：第一に、学力低位層の生徒たちが楽しそうに授業に参加しているA教諭の分析を行う。第二に、A教諭の授業の良さを踏まえた上で、学力低位層を含めた生徒たちの参加意欲を高める授業実践を行う。第三に、生徒たちの振り返りシートの分析などをもとに、授業実践を行い、その際に取り入れた参加意欲を高める手立てについての成果や課題を検証する。

## 2. 生徒の参加意欲を高めるA教諭の分析

(1) 分析方法：第一に、A教諭の授業観を探るために、A教諭が執筆した修士論文の分析を行う。第二に、『授業づくり基準』を分析の視座として、A教諭の英語教師としての良さを総括する。

(2) 分析結果：A教諭の授業観や指導技術の良さをまとめると以下のようになる。①A教諭の授業観の柱にあるのは、コミュニケーション能力の育成及び伸長である、②A教諭の授業構成ではコミュニケーション活動が授業の核になっている、③生徒たちが英語に触れる機会を充実させたり、コミュニケーション活動が活発に行われるように、生徒たちの動機づけが高まるような学習環境の設定を行っている

A教諭のこれらの授業構成や指導技術が、授業やコミュニケーション活動に対する生徒たちの動機づけに繋がっていることが考えられる。そこで、導入やコミュニケーション活動の工夫を柱にして、生徒の参加意欲を高める授業実践を行った。

## 3. 参加意欲を高める授業実践

(1) 実践内容：9月26日から10月24日にかけて、5クラスで5時間ずつ授業を実施した(表1参照)。

(2) 調査対象：公立A中学校の2年生全クラスである。生徒たちは英語を話すこと、聞くことにあまり抵抗を抱いていない様子である。

(3) 参加意欲を高める手立て：生徒たちが主体的に授業に参加できるように以下の手立てを講じた(表2参照)。

表 1. 授業実施表

	授業内容	参加意欲を高める手立ての概要
①	have to, must	○授業者の自己開示を含めた導入 ○授業者の旅行談を Show&Tell で伝える
②	don't have to, must not	○体を使ったインタビューゲーム ○英語の紙芝居による導入 ○グループワークによるカルタゲーム
③	Do you have to～?	○自作ビデオによる導入 ○エンドレスインタビューゲーム
④	Let's make our dream school rules	○SGE の活動形態を取り入れた実践
⑤	英語で道案内をしよう	○実際に英語で道案内に挑戦する (グループワークによる協働学習)

表 2. 参加意欲を高める手立て

①導入の工夫	教師が自己開示をすることで生徒と良好な関係が築くことができると考えた。また、子どもが興味、関心のある情報内容を意識した。
②コミュニケーション活動の工夫	関わり合うことを意識したコミュニケーション活動を取り入れた。また、SGE の視点を取り入れて、個の存在を認めて、活躍の場を保証することを意識した。
③視覚的効果の工夫	生徒たちが興味、関心を示すトピックを提示したり、板書の際にラミネートカードや写真を多く提示した。
④指示行動の明確さ	活動に参加できるように、活動内容の説明を順序立てて丁寧に提示した。
⑤「生徒の声」をもとにした授業改善	生徒と共に授業を創ることを意識して、自己省察を行った。

#### 4. 参加意欲を高める手立ての成果

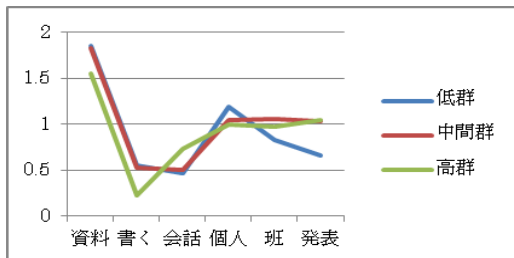


図 1. 実践⑤Let's make our dream school rules

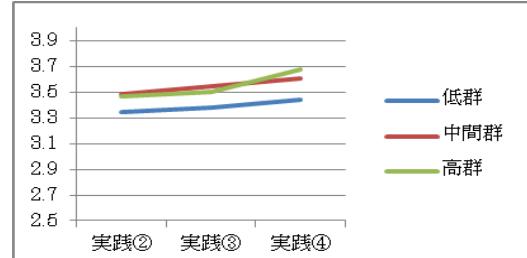


図 2. 積極的にいろいろな人と関わることができた

##### (1) 導入の工夫に関する成果

- ①具体的なコミュニケーション場面を示した映像資料が導入教材として効果的である。
- ②生徒の興味、関心を取り入れたトピックや教材を用いた導入が効果的である。
- ③導入場面は、新出表現を生徒にインプットするという本来の目的に加えて、学力層に関係なく授業への参加を保障することが大切である。

##### (2) コミュニケーション活動の工夫に関する成果

- ①自己表現活動や、お互いの意見をグループ及び全体でシェアリングするという SGE の活動形態を授業構成に取り入れることは、生徒たちの参加意欲を持続させたり、関わり合うことを苦手とする生徒の参加を保障する可能性が考えられる。
- ②積極的にいろいろな人と関わり合うことは、学力層を問わずに促すことができる。

これらの人間形成を目指したコミュニケーションの視点を取り入れることは、学力低位層の参加の保証につながるのではないだろうか。

## 5. 参加意欲を高める手立ての課題：特に、コミュニケーション活動に関する課題を指摘する。

### (1) コミュニケーション活動に関する課題

①新出表現の定着や意味用法の理解は、学力差がそのまま活動の理解度に表れてしまった。

改善策としては、コミュニケーション活動に入る前に使用する英語表現のモデルリーディングを徹底することや、活動内容の指示をより明確にすることが挙げられる。

②グループワーク時に、参加する生徒（中間群と高群）と参加しない生徒（低群）が生じてしまったので、グループワークにおける学力差を埋めることが課題として挙げられる。

### (2) その他の課題

①導入やコミュニケーション活動で高まった生徒の参加意欲を、いかに他の活動へ持続させるか。

②自ら関わり合うことに抵抗を抱いている生徒が、ペアワークの際に孤立してしまう場面が見られた。このような生徒たちに、どのような配慮が必要であるかを検討する余地がある。

## 6. 総合考察～理想の英語の授業を追い求めて～

### (1) 人間形成を目指したコミュニケーション能力の養成

筆者が考えるコミュニケーション能力の養成は以下の通りである。

学力層に関係なく、英語をコミュニケーションツールと捉えて使用し、様々な人と関わり合ったり、自分の思いや考えを伝えたり、相手の思いや考えを受け入れたりする活動などを通じて、心身の自己成長を促すと共に、人間関係を構築するという人間形成を目指したコミュニケーション能力を養成する。

言語技能の指導など実用的目的だけに特化した指導をするのではなく、生徒の個性や思いを教師あるいは生徒同士が理解しあい、伝え合うことを通じて、精神や社会性を助長し、いかに人間形成を育ませるかということを授業観の柱に据えて考えたい。

### (2) 生徒の参加意欲を高める授業構成

導入とコミュニケーション活動の工夫を柱にして、生徒の参加意欲を高める授業を構成する。

#### ①導入の工夫

導入は、新出表現を生徒にインプットするという本来の目的に加えて、学力層に関係なく授業というステージに乗せることが大切である。

#### ②コミュニケーション活動の配慮事項

活動への参加に対するストレスを取り除き、生徒が安心感を抱いて参加することを促したい。

##### 1) 活動内容の説明の明確化

学力低位層は、活動の内容や方法が分からないために、活動に参加できないケースが考えられる。授業者は、活動内容を順序立てて、丁寧に説明することが効果的である。

##### 2) 活動前にデモンストレーションやリピート練習で使用表現を定着させる

活動に主体的に参加できない原因として、言語不安が考えられる。言語不安を軽減させるためにも、授業者が表現の使用場面を具体的にデモンストレーションしたり、使用する英語表現をリピート練習で定着させたりすることが有効である。

### 3) 支持的な雰囲気を意識づける

日頃の授業から、支持的に相手のことを受け入れることを生徒たちに意識づけることは、心地良い授業の雰囲気を生成したり、生徒の主体的な参加を促したりすることにつながる。

### 4) 机間指導の充実

どこに困り感や躓きを感じているのか。一方で、生徒たちが主体的に活動に参加できているかなど、授業者の立場から、生徒たちの良い表れや改善点を活動後に全体にフィードバックすることが大切である。

### 5) コミュニケーション活動に構成的な活動形態を用いる

SGEに基づいた活動形態や活動条件を設定することで、以下の効果が考えられる。

- a. 個の存在を認め、活躍の場を保障する
- b. 多くの人と関われる機会を保障する

## (3) コミュニカティブクラスの生成

人間形成という目的からだけでコミュニケーション能力及び英語教育を捉えることは不十分である。当然、コミュニケーション活動などにおいて、伝達内容や、言語技能も意識づけなければならないし、英語表現や文法事項を定着させるように指導していかなければならない。このような自己成長を促したり、人間関係を構築したりといった人間形成的目的と、英語表現や文法事項を定着するといった実用的目的の両側面を目指した授業及びコミュニケーション活動に示唆を与えてくれるのが、大下(2009)が提案するコミュニカティブクラスである。コミュニカティブクラスとは、授業そのものをコミュニケーションの場と捉え、英語を媒介として授業を行うことにより、英語知識の獲得とコミュニケーションの場の確保の両方が可能になる授業のあり方である。

つまりは、教室で行われるさまざまな教授・学習活動はそもそもコミュニケーション活動であり、教師から生徒への働きかけ、生徒同士の働きかけ全てをコミュニケーション活動であると捉えるのである。図3に、コミュニカティブクラスにおける教室空間のイメージ図を示す。このように、授業が行われる教室空間を捉え直すことで、言語形式や意味形式だけでなく、教師と生徒、生徒同士が関わり合う状況が多くなることを期待できるため、相互交流を通じての自己成長や人間関係の構築に作用することが考えられる。

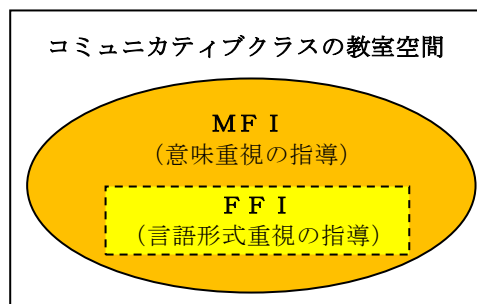


図3. コミュニカティブクラスの教室空間

おわりに：本研究を通じて導き出した授業観やコミュニケーション観を柱に、学校現場で教師経験を積んでいきたい。また、キャリアを重ねる中でも、常に自己省察しながら、生徒の成長を助長するような授業や教材を与えられる教師であり続けたい。そのためには、教師自身が自己開示を促し、生徒との対話を大切にしたり、生徒同士の対話を促がし続ける意識が必要である。授業を構成する上で土台となるのは生徒理解である。常に柔軟な発想や着眼点を持ち続けて、授業向上へのヒントを探究しながら、成長し続ける教師でありたい。

文献：大下邦幸 2009 コミュニカティブクラスのすすめ

—コミュニケーション能力養成の新たな展望 東京書籍